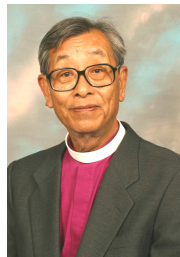


チャブレンより



高野主教は立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の時間には、大変豊かな知識を感じさせる、様々なお話をして下さいます。

キャロリング

高野 晃 一

イギリスの冬は夜が長く寒いので厳しい季節です。それだけに人々はこの冬の間をどのように楽しく過ごすか色々考え工夫しています。色々なマーケットが広場で催されたり、行事が次々に行われたりします。そしてその最大のものがクリスマスです。九月に入ると店では様々な美しいクリスマスカードが売られ、ガーデンセンターではモミの木やクリスマス用品が所狭しと並び、人々は今年どのようにお祝いしようか考えます。

一ヶ月前くらいになると町の大通りには美しいイルミネーションが飾られます。日本では節電で今年は分かりますが、最近では神戸や東京でも飾られているのと同じようなイルミネーションです。商店や個人の家でも豪華に点灯するところもあります。学校に近いクランレーやラジウィック村、ギルフォードやホーシャム町にも素晴らしいイルミネーションが飾られ、辺りを美しく照らします。

十二月二十四日が「クリスマスイヴ(前夜)」です。イエスさまの誕生日をお祝いするのがクリスマスです。西暦は最初のクリスマスから定められました。イエス様の誕生前を紀元前BC、そしてその後が紀元後ADです。この日の夕方、BB

立教英国学院通信

第二百五十九号 二〇一一年十二月八日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

Cテレビはケンブリッジ大学キングスカレッジの「クリスマス礼拝」を毎年放送します。世界で最も優れた聖歌隊と言われる合唱と聖書の朗読からなる礼拝です。イギリス中のほとんどの人が、この礼拝を楽しみにテレビをつけます。この礼拝は毎年DVDに録画して立教の学生は授業で見えています。

教会ではこのイヴの夜、信徒の人が街や村の道を「クリスマスキャロル(クリスマス歌)」を歌いながら歩き、これを「キャロリング」と言います。以前私が働いていたヨークシャーの村の教会でも、毎年キャロリングをして村中を回りました。大きな棒の先にカンテラを結び点灯して先頭に立ち、これに子供たちも沢山参加して大きな声で歌い村中を歩き回ります。村の人々もこれを毎年楽しみにして、チャリティー献金をしたり子供たちにお菓子を用意したりしてくれます。これは本当に楽しい行事です。

そして二十五日「クリスマスの日」の午前零時、人々はそのまま教会に戻りクリスマス礼拝の最初の礼拝に参加します。「クリスマス」とは「キリスト・マス(礼拝:聖餐式)」のこの礼拝のことを指している言葉です。この日には他にも午前七時八時、午前十時に計三回の礼拝がもたれます。この日全ての会社や商店も休みで街はひっそりして、まるで日本のお正月元旦のようです。ただ教会の鐘の音だけが大きく村中に鳴り響きま



エルムブリッジの老人ホームにてキャロリング

と喜んでくれます。生徒にとっても、こうしたイギリスのお年寄りと交流する機会は大変貴重な経験だと思えます。その後で生徒たちはまた学校に戻り、最後の夜をケンブリッジのキングスカレッジと同じような「クリスマス礼拝」を礼拝堂で捧げてお祝いします。他では出来ないようなこのキャロリングとクリスマス礼拝は、生徒にとって生涯忘れられないような素晴らしい経験でしょう。

す。人々はこの礼拝から帰り、昼には長い間考え用意した「クリスマスデイナー」をどの家でも楽しみます。

二十六日は「ボクシングデー」です。貰ったクリスマスプレゼントはこの日まで開かないでクリスマスツリーの下に飾り、この日になって初めて開きます。子供たちの一年で最も嬉しい日で、「スパー、グレイト」などと叫びながら子供たちはプレゼントを開きます。

立教ではクリスマスの日は既に冬期休暇に入っているため、早めに学期の最後にクリスマス行事を行います。食堂には大きなクリスマスツリーを飾り、長い間クリスマスキャロルを繰り返し練習します。そして終業礼拝の前日「キャロリング」を行います。ここ数年は近くの「老人ホーム」をバスで訪ね、クリスマスキャロルや日本の歌を合唱しお祈りもします。沢山のお年寄りたちがこれを楽しみに集まり、最後には「本当に嬉しかった」と喜んでくれます。生徒にと



【2学期の行事】

9月10日	生徒帰寮
9月11日	始業礼拝
9月12日	高等部実力テスト
9月18日	JAPAN 祭りへ外出・ボランティア参加
9月22日	午後ブレイク
	茶道部、大英博物館の茶道講演会へ外出
9月24日	ロンドン日本人学校の文化祭へ外出
10月2日	第31回因数分解コンクール
10月7日	川島成道バイオリンコンサート
10月9日	ギター部コンサート
10月15～16日	英語検定一次試験
10月16日	ブーさんの森へ乗馬外出
10月19日	アウトイング
10月23日	TOEIC・TOEIC Bridge の資格試験
10月28日～11月5日	オープンディ準備期間
11月6日	オープンディ
11月13日	英語検定二次試験
11月23日～28日	期末考査
12月1日	スクールコンサート
12月2日	クリスマスコンサート、キャロリング
	クリスマス礼拝
12月3日	終業礼拝、生徒帰宅
12月9～10日	高等部入学試験(A日程)実施

目次

第6回 チャブレンより	1
オープンディ	2～3
英語科校外学習レポート	4
社会科フィールドワーク	4
茶道部 大英博物館へ	5
FIRST AID トレーニング	5
ブーさんの森で乗馬体験	5
サイエンスワークショップ	6～7
短期留学	8

コラム

アップルデー	3
先生のエッセイ	3
朝日小学生新聞掲載	7

オープンデイ

二ヶ月の間、たくさんのお話し合いを重ね、泣き笑い、喧嘩もして励まし合って作り上げた、それぞれのクラス企画、フリープロジェクト。十一月六日(日)、今年もオープンデイは大いに盛り上がりました。

小六・中一の企画は、『TOTORO WONDERLAND』。スタジオジブリと、ディズニーアニメを対比。中二は、『がらくたミュージアム』。リサイクルでできるペットボトル、フタなどをひたすら集め、様々なアートを製作。中三は、『星の伝説』。十二星座と星座の伝説について、よく知られているけれど「そもそも何が発祥？」をもとに紹介。高一は、『LOST IN AMAZON』。アマゾンに迷う旅人を主人公に、蛇やワニなどの力作の模型を中心に展示。高二は、『いのち』。「世界がもし100人の村だったら」という有名な本をもとにいのちの大切さ、私達が立ち向かってゆくことの大切さを伝えようとするものでした。

がらくたミュージアム

中二 松田 祐理子

一学期、皆が言うオープンデイはとても大変そうで漠然としていた。オープンデイってどんなんだろう？そんな思いばかりが強まった。二学期、周りがだんだんオープンデイに向かって走り始める。その中、私は一人、よく分かっていなかった。どんな風になっていくのかな、わくわくした気持ちが生まれた。

私のクラスは五人しか生徒がいない。先生を合わせて七人である。七人出来ること。がらくたミュージアムを開こう。ひよんなことから決まったこのテーマは今思うと本当に素敵なテーマだ。夏休み、とにかくがらくたをかき集めて二学期に持って行った。皆で整理したがらくた。見て

先生と一緒に、皆と一緒にとことん作って達成感で満ちることができた。



中2のオープンデイ準備の様子
たくさんのがらくたを集めて作品を製作

いるとどんどんイメージが膨らんでいく。少しずつオープンデイが増えつつあるにつれて活動することが増えていった。がらくたミュージアムでやるモノが決まり、あつと言う間にオープンデイの準備期間に入った。机と椅子が片付けられ、がらくたしかないがらんとした教室が残される。一週間で出来るか不安に駆られながら一日が過ぎていく。

私はがらくたミュージアムの中でからくりを作る係である。どんなものを作るのか、パツと思いついたのはタワブリッジである。目の前にあるがらくたをとりあえず手に取り、当てずっぽうに作っていく。なんとなく形が出来たと思った時、全然タワブリッジに見えない、と言われた。二日間タワブリッジしかやっていなかった私は、悔しくて悔しくてたまらなかった。どこが似てないのだろう。タワブリッジの写真と作品を見比べて、少しづつ近づけていった。タワブリッジと言われて分かるのではなく、すぐ見て分かってもらわなければならぬ。その難しさを実感した。

感じたのは、先生と生徒が力を合わせてオープンデイを作っていくことの素晴らしさである。生徒と先生が支え合っているのを作っていく。これは当たり前のようにでなされていくことだ。オープンデイ当日に先生と皆で作った作品を見て、来てくれた人が感激してくれた。感激してくれたのは、その作品に一週間の皆の思いが詰まっているからである。先生と一緒に、皆と一緒にとことん作って達成感で満ちることができた、という経験は、これから私の中でずっと生きていくと思う。

オープンデイの一日後、表彰式と閉会式があった。中二のがらくたミュージアムは沢山の賞を頂いた。本当に嬉しかった。自分たちが作ったもので見てくれた人が楽しんでくれたことが分かってとても幸せな気持ちだった。

これからも皆で作っていく大切さと喜んでもらうことの嬉しさを感じる事のできるオープンデイにしていきたい。

初めてのオープンデイ

高一 浅川 水晶

本格的に焦りを感じ始めたのは、三日前。クラス企画に加えて掲示女子、ダンス企画の仕事や練習があったからでした。それまでの日々はあつという間に過ぎていっていき、ふと気が付くと三日前。どれもあいまいで未完成な状態。「もしかしら、間に合わないかもしれない」という不安と、「自分は何をやっていたのだらう」という後悔で、気持ちが本当にいっぱいでした。

特に、ダンス企画。オープンデイ準備期間になってから、ダンス企画の参加者全員で踊る曲を練習し始めたの



ダンス企画の発表

ほかの学年の企画もとても感動しました。それらを参考にして、来年の企画を今年とは比べものにならないほどの素晴らしい企画にしたいと思います。

「負けたくない」という気持ちが再びわきあがりました。

で、毎日の練習の疲れから、なかなか集中できず、振り付けも覚えられませんでした。三日後にひかえた本番、そして後夜祭への恐怖がピークに達し、「もうあきらめたい」と思い、泣きたくなる時もありました。しかし、私と同じようにフリープロジェクト企画と係の両方に参加し、時間と戦っている人たちを見ると、「負けたくない」という気持ちが再びわきあがりました。

オープンデイが終わりを告げた今の私は、達成感に満ちています。しかし、クラスの企画へももっと積極的に関われば良かったな、ととても思いました。あわただしく、このオープンデイ準備期間を走り続けていたクラスメイトの表情には、私とはまた違った「全てやり切った」という達成感に満ち、とても輝いていました。それを見ると、「うらやましい」と純粹に思え、「絶対に来年は、私もこのような表情で最後のオープンデイを終えたい」と決意しました。

オープンデイ準備期間に入る前、「このクラスがまとまるのかな？」と思っていたけれど、最後はともまとまり、クラスが一つになっていたような気がします。結果は、総合三位と賞を取ることでできました。先生がおっしゃっていた通り、私も結果が全てではないと思います。しかし、まだ入学して約半年しか経っていないみんながまとまり、最後まで成し遂げたことに賞を頂けた、と私なりに解釈すると、大変嬉しい結果です。

アップルデイ



毎年恒例ラジウィック村のアップルデイ。大量のリンゴを昔ながらの方法でジュースにしたり、お菓子を作ったり…秋祭りの一種です。立教生の参加も今や毎年恒例。今年は車の定員をオーバーするほどの大人気でした。

偉大な存在

高三 水田 大智

高三になってから今まで、行事がある度何回これが最後と言ってきた事か。しかし、高三生徒全員でやる大きなイベントは、このオープンデイが正真正銘の最後だ。高三は縁の下の方持ちとよく先生方から言われる。確かにその通りだ。陰ながら売店を開くなどオープンデイがより活気溢れるものにしていくのが高三の役目だ。しかし、高三にできることはそれだけではない。僕は思う。オープンデイにおけるやりがいやどうすればもっと効率良くいい物が仕上がるのかを後輩に伝えてあげること。また高三の役目だと思う。

ある日食事の席で一人の後輩が「オープンデイは時間も取られるし、学年同士で意見が割れたりするし、正直きつい」と言っていた。僕はその時その後輩に、オープンデイがいかにその学年にとって良いものになるか、そして、本気でやった後の達成感がどれ程のものかを伝えた。これは正直やり終えた後にしか分からない事だから仕方がないのも分かる。しかし、当日直前になると、後輩たちの廊下の方から急ぎ足の音や、声を張り上げて準備をしているのが聞こえてきて嬉しかった。

そして当日。どのクラスもそれぞれに頑張った展示を作り上げたのがよく分かる。仕上がりだった。嬉しそうに展示物を説明する後輩を見て微笑みかけた。結果発表

の時、生徒会長が言っていた。「大事なものは結果じゃなくて、これまでにクラスが丸となって積み上げてきた努力ややりがいだ」と。本当にその通りだと思う。僕は過去に一回も優勝したことはなかった。でもこの学校で一番心に残っている行事だ。後輩もこのオープンデイで何か心の中に残るものがあつたらいいなと純粋にそう思った。僕は当日焼き鳥の当番だったが、その二日間の準備に全力をかけてしまった。きつとまだどこかにオープンデイへの熱意が残っていたのかもしれない。やはりオープンデイは偉大だ。



高3によるウエイター&ウエイトレス

オープンデイを通して

高二 福谷 なつみ

知らぬが仏とは大げさな表現かもしれない。だが、この高1のクラス企画をやる前の心境をよく映し出している言葉だと思う。

今まで学校で行われる募金活動などに対して私自身を振り返ってみると、悲しみ同情していたと完全には言い切れない。こ

やはりオープンデイは偉大だ。

んなことがあつたのかという過去の振り返りのようになっていて、心の底からの共感はできていなかった。むしろ、知らないという状態に違和感を感じなかった。テーマが決まってしまうからの数週間の資料集めはそんな私に驚愕の事実をつきつけてきた。私が担当した水不足の箇所では、アフガニスタン为例として調べたのだが、インフラはおろか、半数以上が安全な水を飲めていない実態。さらには、メジナ虫と言われる不衛生な水の摂取から体内に入ってしまうこの寄生虫の恐ろしさを知る。体内に残った虫は最終的に肌を突き破って出てくるというのだ。あまりの怖さに、このメジナ虫の部分はカットしたが、これはうそではない。

資料からだけでは無い。写真からの印象もすさまじかった。三月に日本を襲った地震のものである。互いに肩に手を置きはげましあう姿。人だけでなくペットも助ける救助隊。ただ文章に書くだけではない、悲しいというイメージしか持てないところを、写真ではその人、風景の細々とした感情を露わにしていた。皆の顔に笑顔はない。

日本人全般に言えることだが、私達は核心を知らなさすぎる。自然災害が起きたとき、かわいそうだと皆が言った。だがどれほどの人が実際に現状を把握していたのだろうか。多くの日本人は飢餓や水不足に疎遠だ。

知らない為、今安定した生活を送っている。やはり知らぬが仏である。

この企画を通して、私は全てを見たと思いはしない。むしろこれらはほんの



高2のクラス企画『いのち』

～先生のエッセイ～

1学期の中2は男子2人、女子2人の計4人のクラスだった。当然オープンデイのクラス企画は中1と合同になるのだろうと思っていたら、担任の奥野先生のリードで当たり前のように4人のプロジェクトが始まった。2学期、新入生男子1人を加えて本格的な準備が進む。誰一人サボれない、サボらない。1人がサボれば1/5が機能しない訳だから自ずと素晴らしい責任感が生まれてくる。女の子がペンチを使ってアルミ缶をひらいたり、ガキ大将が天井まで届くペットボトル製の巨大ロボットを作ったり…僕ら教員も時間ができればすぐに手伝いに行った。

貴重な助っ人だからやり甲斐もあった。少しずつ「モノ」が出来上がっていくのが、生徒と同じ様に嬉しかった。一緒に知恵を絞って作業をしていると、ふと我が子に微笑みかけているのと同じ顔をしている自分に気づく。一生懸命やることの楽しささえ味わってくれればいいと思った。

そして表彰式。今年の中2は、さらに「総合優勝」というご褒美でもらった。神様がいた。

(中2 副担任)



入り口にしかならない。だが私達の企画「Life is...」が総合優勝したのも、私達が全てを表現しようとしたのから。考える糸口を与えたこの企画、私はすごいと思う。普段からあまり意識せずに生きてきた私達を改めようと導いている。

もし世界が百人の村で、私がその村人の一人だとしたら…。私が今と同じ境遇にいる保証はどこにもない。



英語科 校外学習レポート

まだまだ英語を習い始めたばかりの中学生たちが、地元の町や村に繰り出して体当たりで英語を試すイギリス文化体験記。今学期は計七回の外出。その中でレポート、写真、集計、地図作り等分担して生徒達自らの手で作り上げた作品の一部を紹介します。

3. どのようにして知ったか。

- ・剣道部のデモンストラーションで。
- ・ラジオの放送で。
- ・知り合いが学校でよく使うタクシー会社のドライバー。
- ・ハイキングで。
- など

4. 立教英国学院についてどう思うか。

- ・ Very good
- ・ Beautiful
- ・ 制服がかわいい
- ・ いい評判を聞く
- ・ Excellent!
- など

私たち中二は英語の授業で「イギリスの文化や町に触れよう」ということで一・二週間に一回のペースで周りの町や村に出て調査をしています。

十月四日、私たちは三回目の調査をしにビリングスハーストへ行きました。

今回の目的は前回と同じ、「立教英国学院を知っているか」に始まる四つの質問をもっとたくさんの人に聞くことです。一人十人に聞くのが目標です。前は人通りが少ないところでインタビューを実施したため、多くの人に聞けなかったという失敗をもとに今回はスーパーマーケットの入り口、出口で二グループに分かれて質問しました。今回はすらすらとまでは行きませんが、スムーズにインタビューすることができたと思います。

調査の結果、多い人で七人、合計で二十六人の人にインタビューできました。目標達成とまではいきませんでしたが、前回より多くの人に聞くことができました。インタビューの内容をまとめると、

1. 立教英国学院を知っているか。

YES: 十七人 / NO: 九人
2. 立教英国学院がどこにあるか知っているか。

YES: 十五人 / NO: 二人



ビリングスハーストにて

という結果になりました。中には、「立教の先生の子供を知っている。」と言う人や、「(毎年学校の近くの老人ホームへ立教生が赴き、クリスマスソングを歌う)キャロリングを知っている。」と答えてくれた人もいて、立教が現地の人とつながっている気がしてとてもうれしくなりました。

立教のことについて聞くのは今回が最後です。二回続けて同じ質問をすることで、話す流れがつかめ、リラクセスしてインタビューすることができました。次回もかたくならずにインタビューをしていきたいです。(記録: 松田祐理子)



社会科 フィールドワーク

十月十三日(木)、午前の授業が終わるとお弁当を持って出発した小六と中一の十六名。行き先はウィールド&ダウンランドオーブンエアミュージアムです。

先学期から始まった野外学習。英語の授業では既に、外へ出てインタビューしたり、地図をつくったり、様々な取り組みが毎週行われています。社会の野外学習は一学期に一回。先学期はホーシヤムの街を歩いて地図づくりをしました。今学期は「農業博物館」の見学です。



ポイント① ベイリーフファームハウス
十六世紀の富裕農民の住まい。一階の大広間の構造や特殊な材料でつくられた食器、二階のベッドやトイレが注目です。食器はなんと、牛の角や革でできていました。二階のトイレの便座の下は公の通り道。…本当に使用したのでしょうか、このトイレ?

ポイント② ラガーシヤル水車小屋
十七世紀の粉挽き小屋。池から流れる水によって大きな水車がまわり、これまた大きな石臼が動いて実際に小麦を挽きます。小型の石臼が出ていて、手で回す体験ができました。重くてなかなか大変。水を水の力によって回すのだから、水車小屋というのは、人が開発した道具の中でも本当に面白いものだと思います。

ポイント③ 建造技術資料館
様々な工具や材料を集めて、鍛冶屋や壁塗り職人、木工職人などの仕事を紹介するギャラリー。辞書で工具や材料を確認しながら、「BLACKSMITH」や「CARPENTER」が一体どんな職業を指すのか推測します。

制限時間は一時間半。どれだけ回ることができたでしょうか?
あちこち面白かったらしく、じっくり観察したグループは「ポイント回るだけで精一杯だった!」一方で、「たくさん見てきた!」というグループもありました。粉挽きのほか、近世の料理の実演や鍛冶の実演など、イベントも盛りだくさんだったフィールドワーク。学校に戻ってきてから、一週間かけてまとめ作業を行いました。



茶道部
大英博物館へ

九月二十二日(木)、裏千家のロンドン出張所からご案内を頂いていた大英博物館での催しに、茶道部員七名が参加しました。今年は裏千家の十五代お家元、現在十六代へ譲られて「大匠」による講演会です。大英博物館での催しは呈茶と、大匠による講演会で構成されていました。実演のお点前では、部活の時間にお互いの割り稽古や点前を見るのとは、わけが違うため、生徒たちは一つ一つの動作を真剣に観察していました。

追求すればするほど奥深い茶道

高二 藤木 紫苑

昨年も行われている大英博物館での茶道の講演に、私は初めて参加しました。そこには英国人関係者、日本人の参加者の方がたくさんいて、お客様のお持て成しがされていました。講演は裏千家の前お家元「本人」が来られていて、とても貴重なお話を聞くことができました。英国の地での講演という点もあり、まずは日本と英国の文化などにおける共通点などを挙げながら楽しいお話がありました。どちらも女王、天皇の下でできた国家で、お茶を飲む習慣があること。「お茶でもいいかがですか」「May I serve you tea?」そのお茶を出して相手をもてなす心の清らかさ、大切さを改めて知りました。

同じペットボトルの水を飲むにも片手で飲



茶道部によるお点前

道、初めて聞いた御点前の動作の意味などもあり、もつとお話を聞きたいと思うほど時間はあっという間に過ぎました。いろんなものが単純化されていく中で守るべき日本の伝統を守り、問うべきことを問い、異文化とのふれあい、理解し合っている姿は『現代』らしさを感じると同時に強いあこがれを感じました。

んでしまうのではなくて、コップに移したりして、両手を添えて飲めば何倍も恵みに感謝できるし、おいしく頂けるはず…。作法というのは相手を思う心、感謝を表す方法なのであると教えて頂きました。デモンストラクションの中でも、袱紗で清める動作、お茶を飲む作法など、とにかく動きそのものではなく『心』を込めているか、表しているのが大切であると強調しておっしゃられていたことが、とても印象的でした。

今回は三月の東日本大震災が起こったことで、相手を思いやる気持ちの大切さ、自分の人生を生きる心得、今ある生活を見つめなおす機会がありました。ステージ上にセットされた茶室の中の掛け軸には『無』という文字が書かれていました。大匠「本人」が書かれたという『無』の文字には、人間は無から始まり、生きて行く中で欲が出ていろいろなことが苦しくなる、常にいつ『無』になるかわからない覚悟を持つて生きることの難しさや大切さを今、震災後の日本が考えるべきではないかという問いの意味が込められていました。

そのようなお話を聞いて、キリスト教との共通点などがあることを考えると、武士の時代仏教的価値観の中に生まれた『茶道』というものも精神的な部分が重要であるため、一種の宗教のようなものとも言えるのではないかと思います。

追求すればするほど奥深い茶



FIRST AID
トレーニング

高二的生徒が保健体育の授業でファーストエイドの講習を受けました。今までこのような機会はありませんでしたが、クラブ活動で下級生を指導することも多い警察官でもある外部講師の方をお呼びし、トレーニングを行いました。

まずは、応急処置の優先順位として知られている「DRSABC」から始まり、D=Danger (回りに危険なものがないか確認) R=Response (倒れている人が応答するか) S=Shout (助けを呼ぶ)

A=Airway (気道確保) B=Breathing (呼吸をしているか確認) C=Circulation (心臓マッサージ) 呼吸と心拍が確認されなかった場合にCPR (心肺蘇生)を行います。

生徒は数体のマネキンを前に心臓マッサージを三回、人工呼吸を二回繰り返して何セットも行いました。初めは楽しそうに行っていたのですが、想像以上に大変な作業に、人の命を救うということがどういうことなのかを知ることができた瞬間でした。

他にもリカバリポジション、マネキンを使用し、どこに物を詰まらせたときの対処法、手足の外傷時に三角巾を使用して固定する方法など、たった二時間の間に身近で起こり得ることを中心に、実際に『自分でやってみる』という体験

が出来た生徒たち。最後に名前入りの修了証を受け取り和やかな雰囲気です。講習を終えました。



物を詰まらせたときの対処法



ブーさんの森で
乗馬体験

皆さんはイギリスに來たら何をしてみたいですか？ロンドン観光？それともホームステイ？英国らしく、『乗馬』なんていかがでしょうか。

馬は一般的。ロンドンでは騎馬警官が、カントリーサイドでは馬で散策する人は見慣れた生活の一部です。立教英国学院では、金曜日ごとのフライデースポーツの一種目として、『馬が運動する』と思うことなれ。トロット(速歩)やキャンター(駢歩)をずる馬に合わせて、立派に騎手も運動することになります。馬場で基礎をじっくり学ぶと、ハッキング(馬に乗って外を散歩)に出ます。馬で散策する、イギリスの草原や森の中は最高です。美しい自然と、もともとこわいらしい羊たち。ハッキングが大好きな生徒騎手たちで、十月にはアッシュダウンの森へも遊びに行きました。

「アッシュダウンの森」とは、有名な「くまのプーさん」の舞台となった森です。ふだん乗り慣れたサラブレッド系の馬よりも、ずんぐりとした体に、フリンジのような毛で覆われたお洒落な脚、個性的な毛並みをもったアッシュダウンの馬たち。騎乗しながら丘を越え、また下り、落ち葉がカサカサ音を立てる木々の間をくぐり、広大な森をゆったり歩いたり、走ったりして楽しみました。冬も間近な森は、灌木の黄色い花々と、冬枯れたダイナミックな景色がすばらしく、季節を目に肌を感じるひとときとなりま



アッシュダウンの馬たち

ケンブリッジ

サイエンス

ワークショップ

（東日本大震災被災地域より
参加校を迎えて）

今年も昨年に引き続き、七月二十四日よりケンブリッジ大学にて、日英高校生のためのサイエンスワークショップが開催された。クリフトン科学トラストのアルボーン博士が主催し、ケンブリッジ大学と本校が共催としてその運営に携わった。今回のワークショップには一般応募参加高校に加え、東日本大震災被災地域を代表して、六校の特別参加校を設けた。

このワークショップでは、科学の最高峰にあるケンブリッジ大学で科学探求実験の指導を直接受けるだけでなく、社会の中で果たすべき科学の役割、社会の問題解決の手段としての科学の役割を、先端研究者、英国人高校生との対話、討論を通して体験することを目指している。また、ワークショップ前にはロンドン研修を行い、近代科学学術会議発祥の地である王立協会、科学と市民との対話の始まりである王立研究所、日本近代文明の原点となったロンドン大学ユニバーシティカレッジでの研修も行われた。被災後の困難な状況にある中で、ワークショップへ参加し、同世代の日英の高校生と共に生活し、先端研究者と科学研究に携わることにより、将来に夢と希望を持ち、被災地域の精神的復興の糧になることを願っている。

【特別参加校】

福島県立福島高等学校
福島県立相馬高等学校
宮城県仙台第二高等学校
宮城県宮城第一高等学校
宮城県仙台二華高等学校
茨城県日立第一高等学校

【一般公募参加校】

立教池袋高等学校
立教新座高等学校
かえつ有明高等学校
立教英国学院高等学校
英国現地高校7校

◆被災地域高等学校を代表して

ワークショップ開催前に、被災地域、英国側主催者がそれぞれの思いを次のように述べている。

今回の東日本大震災および原子力発電所事故により、多くの学校が被災しました。このような中、日英両国の皆様方よりのご支援により、英国で行われるケンブリッジサイエンスワークショップに参加できることとなりました。茨城県、宮城県、福島県から参加する六つの高校の生徒、引率教員を代表し、深く感謝申し上げます。

この機会は高校生にとって世界を見るための貴重なチャンスとなります。今回の震災は日本の大きな転換期になると言われておりますが、今回の参加者がグローバルな視点を身につけて、新しい日本を構築する人材となることを願ってやみません。皆さまのご支援やお気持ちをしつかり胸に刻み、ワークショップに参加することを誓い申し上げます。

福島県立福島高等学校教諭 橋爪清成

◆英国側主催者を代表して

We are delighted to welcome to Cambridge students and teachers from schools in Japan which have suffered so much from the effects of the March 11th tsunami and earthquake to attend the 2011 UK-Japan Young Scientist Workshop at the University of Cambridge this summer. As the result of generosity of many organizations we are able to cover all these schools' costs in Cambridge and also their air fares from Japan. We and all the British students and teachers look forward very much to welcoming them to England as our special guests. We are sure that, by living and working together in small teams with Cambridge scientists and engineers, not only will their understanding of science deepen but also they will see their futures in a global context and form international friendships which will last for many years.

クリフトン科学トラスト エリック・アルボーン博士

ワークショップ概要

ケンブリッジ大学で研究する最先端科学者の指導により、今年は九つのプロジェクトが企画された。

○化学：金ナノ粒子の合成

○物理：日立研究所での、電子機器への将来的なナノテクノロジーの応用

○物理：キャンベンディッシュ研究所での柔らかなさの測定

○植物科学：石油を合成する藻の光合成条件についての探求

○地球科学：地震波の探求

○生命科学：認知科学と細胞間カルシウム信号伝達について

○宇宙科学：宇宙科学とは何か 宇宙科学者へのインタビューを通して

○生物人類学：霊長類における行動パターンと遺伝子解析について

○環境放射能：放射線データの解析と安全基準についての考察



放射能プロジェクトでのディスカッション

どのプロジェクトも非常に興味深いものであったが、特にここでは東日本大震災での放射能問題についてのプロジェクトの紹介をしたい。

このプロジェクトは、オックスフォード大学物理学部医療放射線の専門家であるアリソン教授の指導で行われた。震災、津波による原子炉事故による放射能汚染が日本では大きな問題の一つになっている。参加校の福島高校では既に校内の放射線データの計測が行われ、高校生が持ち込んだデータがこのプロジェクトで真剣に討論されることとなった。この問題に対して科学はどのように答えるのか、また、事態を心配している一般市民の人たちとどのように対話を行っていくのか、まさに我々の目指すワークショップの意義、すなわち、社会の中で果たす科学の役割、意味を討議した質の高いプロジェクトの一つとなった。

アリソン先生は二年前に『放射能と理性』という題名の本を出版している。今までに起こった放射能汚染、広島、長崎、チェルノブイリでの汚染の状況と致死率、癌の発症率、白血病の発症率、また、病院で行われている放射線治療のデータをもとに、どのように放射線の安全基準が定められているのか、人々の安全基準への対処方法についてがまとめられている。放射能への恐れから放射能は危険だとの短絡的考えではなく、理性をもって対処すべきであるとの先生の意見である。



霊長類の行動と遺伝子解析プロジェクトチーム



アリソン教授を囲んでの放射能プロジェクト



研究発表会

一方で放射能汚染を非常に心配している福島県の人々の気持ちもよく理解できる。参加した福島高校の生徒達は既に、校内の放射線汚染のデータを計測し、これをもとに作成した汚染マップを、現状を伝えるため、持参していた。どこまでが安全で、どこからが危険なのか。その安全基準の根拠は何か。今後どのような危険を抱えて人々は生活していかなくてはならないのか。現地福島の高生でなければできない真剣な質疑・討論があらゆる方面から、日英の高生、そして専門家である

アリソン先生との間で行われた。まさに、今科学が果たすべき役割は何なのかを実感させられる内容であった。

二日目に、BBCケンブリッジラジオ局によって、このプロジェクトの取材が行われた。一般的な取材に終わることなく、取材を通して、原子炉事故の取材のあり方にまで、記者を含めて討論が始まったのは驚いた。さらに、例年であれば討論は英国人の生徒が主導をとっていたが、今回は日本側の生徒から様々な日本の現状が報告され、視点の鋭い質問が寄せられていた。舞台裏では、日本側の生徒だけが集まり、今までの話のポイントの確認、今後の展開、どこまで英国側に伝えていくかの話し合いが自主的に持たれていた。このことも、今回のプロジェクトの質の高さを示したものと思われる。

このような深い探求と質の高い話し合いが持たれたのも、日英の高生の間に入ったフアシリテイターと呼ばれる方のお陰だ。通常はケンブリッジ大学の日本人学生にお願いするのであるが、このプロジェクトでは日本で精神科医の経験を持つ山澤医学博士にお願いすることになった。アリソン先生からの科学的データだけでなく、医学的、精神的に放射能汚染がどのように取り上げられなければならないかの点について、更に多面的な討論ができたことは山澤博士の指導による部分が大きい。

最終日には各プロジェクトより研究発表会がなされた。科学成果を発表するだけでなく、このワークショップ期間中に学んだこと、英国人高校生より学んだこと、ケンブリッジ大学の町並みより学んだこと等、このワークショップを通じて学んだ成果が生徒より発表され



マリーエドワードカレッジ
嘉悦ケンブリッジ教育文化センターにて

た。どの発表も英語を使つて堂々と発表する生徒たちの立派さに、また何気なく日本人学生をサポートする英国人高校生の配慮の深さ、日本語での発表にも感激した。今は大変な苦勞をしている被災地の高校生であるが、将来このケンブリッジで学んだことを活かして、被災地の復興、新しい日本の創造にむけて、積極的にリーダーシップをとってくれるだろうことを実感するとともに、今回英国人高校生との間に築いた友人関係という強い絆が将来大きな働きをすることを確信した。

最後のハイライトはケンブリッジで最も古いカレッジの一つであるコーパス・クリステイ・カレッジでのディナーだ。何百年も経った大学の食堂で、昔からのしきたりに従い、ラテン語の食事の祝福が始まった。まさに、ハリポッターの世界そのものだ。ハイテーパーに、ライト元駐日大使及び大使夫人、英国化学会代表の方々が席に着かれた様子から、このワークショップを通して東日本大震災被災者に対する温かいサポートを改めて感じた。このハイテーパーの下長いテーブル

に座つて、ワークショップの経験について熱心に話をしている生徒の様子に、このワークショップで一回りも二回りも大きく成長した高校生たちの姿を感じ、運営企画者の一人としてこの上ない喜びを感じることができた。

来年のケンブリッジでの再会を約束し、いつの日か英国人高校生と共に東北の地でのサイエンスワークショップを実現できることを夢見つつ、ケンブリッジに別れを告げた。

本校が、朝日小学生新聞・朝日中学生ウィークリーで紹介されました



朝日小学生新聞で
紹介された作品を持つ小6

「私の学校」

小6 大野 菜々子

立教英国学院は全寮制の学校です。授業中は制服ですが、放課後は私服で生活しています。最初は寮生活で家族と離れるのがいやだなと思っていましたが、友達や先輩方がやさしくて、とても楽しいので、いまは家族と離れることについていやだとは思いません。

学校は朝、ラジオ体操をして、朝食を食べ、礼拝してから授業が始まります。学校では毎朝礼拝があります。礼拝ではチャプレン(学校づきの牧師さま)の話を聞いたり、キリストの言葉を集めた福音書を先生が読むのを聞いたり、聖歌を歌ったりしています。

授業でも聖書の時間があります。教室でチャプレンのお話を聞いたり、歌を聴いたりします。

わたしは日曜日や放課後の時間があって天気がいい日、友達とブラックベリーを取りに行きます。たくさんとれた日は先生とジャムを作って食べます。授業でイギリスの町などに外出することもあり、とても楽しい学校です。

朝日小学生新聞 11月6日(日)掲載

短期留学

昨年度同様、英国のウォルバーハンプトン校へ六名の女子生徒が短期留学に参加しました。七月十日から五泊六日、生徒の家庭にホームステイをしながら、現地校での授業や課外活動などを体験するプロジェクトです。昨年に始まって今年で二度目、参加人数を拡大しての実施となりました。三学期は、ウォルバーハンプトン校の生徒らが本校を訪れることになっています。

夏休み最初の一週間

高二 北端 ふみ

私の高2の夏休みはイギリス現地の女子校への短期留学で幕を開けた。私にとって今回の留学は去年のリベンジという意味があった。去年の私は、英語はしゃべれない、会話にも入れない、友達に頼りっぱなし、という最悪の日本人だったと思う。すごく貴重な経験だったのに無駄にしてしまったと今でも後悔する。だから今回は去年とは違う場所だけど、もっと積極的に英語を話せるようにという目標でがんばった。



Wolverhampton School

ただでやっぱり意思疎通が出来た時の感動はすごくやる気が出る。もともととしやべりたい。そうなるにはもっと勉強しなくちゃいけないのだけれどもみんなとしやべってていて一番感じたことはみんな、将来の夢が明白なこと。高校の時から「こんなことを勉強したい、だから今勉強しなきゃいけないことはこれ」というのが分かっている。私は将来のことを考えているつもりだったけど、そのことを今の勉強につなげることはしていなかったし、あんなにまだ自分の夢を熱く語れない。次会う時までにはしっかり語れるようにしておこう。

学校に着くとまず物理室へ。そこで授業の前にみんなでおしゃべり。カフェテリアでココアを奢ってくれたりした。そしてホームルームの教室に移動し、出席、連絡をした後、いよいよ授業開始。私のお世話をしてくれたニキータは理系の女の子。

茶を飲んだ後、お別れ。あんなに別れがさびしかったのは始めて。涙が止まらなくて自分でもびっくりした。英人の子に日本語で「ずっと友達でいましょう」と言われてまた涙が。三学期に会えるとわかっていてもつい別れだった。三学期が待ち遠しい。

編集後記

今秋は穏やかで暖かい気候に恵まれました。昨年度は雪のため中止になったキャロリングも、無事執り行うことができました。夏期休暇中の短期留学やサイエンスワークショップのプロジェクトの拡大に加え、各科による校外学習が行われました。今年から全校生徒が一斉にTOEIC資格試験を実施し、900点以上を獲得した生徒もいました。今後も継続的に本物の英語を学ぶ機会を増やしていく予定です。

また来年も実り多き一年にしたいと思います。新年もまた立教英国学院をよろしくお願い致します。よいお年をお迎え下さい。

Merry Christmas!

小／中学部／高等部入学試験

【小学部5年 / 中学部1年 2012年4月入学】

出願期間：2012年1月10日～1月18日

選考期日：2012年1月22日

【高等部1年 2012年 4月入学〈B日程〉】

出願期間：2012年2月6日～2月15日

選考期日：2012年2月19日

※突然の海外転勤でお困りの場合には、上記以外でも受け付けます。

お気軽にご相談下さい。

メールマガジンご希望の方は下記ホームページの「メールマガジン配信登録」から登録ができます。

www.rikkyo.co.uk

立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は下記までご連絡下さい。

ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk